

ひそかに増えているマンリョウ



マンリョウ（ヤブコウジ科）

ある年の秋、庭でいらなくなったマンリョウを根元からばっさり切ってきれいに片づけました。ところが次の年、株から2本の^{かぶ}新芽が伸びてきて、元の3分の1の大きさにまで復活してしまいました。マンリョウはいったん根をはると、そう簡単には絶えないじょうぶな木だということを知りました。

マンリョウは漢字で書くと「万両」。家に植えておくとお金持ちになれそうな名前ですね。鮮やかな赤い実とつやのある緑の葉を冬中つけていることが喜ばれて、この名前がつけられたのでしょう。自然状態では、東海地方から四国、九州、沖縄など雪の積もらない暖かい地方のやぶに生えている高さ1m程の木。富山県内では昔から民家にはよく植えられてきましたが、自然の中には生えていませんでした。

しかし最近、植えてもいないのに、公園の^{いけがき}生垣の下などでマンリョウがひそかに育ち始めているのです。いったん根をはると切ってもなくなる強い強さがあることを考えると、県内の公園の^{こかげ}木陰がやがてマンリョウだらけになるのではないかと心配になります。

マンリョウが増えている背景には、民家に植えてある木から鳥や強風などによって、常に^{しゅし}種子が自然の中へばらまかれていることと、近年富山の平地の雪が少なくなって^{めば}芽生えが生き残れるようになったことがあると考えられます。人間の生活と環境のちょっとした変化とがあいまって、植物の自然の分布が変わっていく一つの例として、記録しておかなければなりません。

（2012年1月 太田道人）